

# 五輪後の中国

## 「大国だが途上国」を自認

「一方で、五輪の間、中国社会はメディアを通して世界の視線にさらされました。見られることを実感し、同時に世界がいろいろな決まり事やルールで動くことを知った。自信をつけた中国が何かを始めるのではという見方もありました。五輪の開催は慎重です」

「五輪の開催が定まるのはこれからでしょう。64年の東京五輪も88年のソウル五輪も、その後の国際社会での振る舞いによって、あの国は五輪で変わったな、と評価された。少なくとも2010年の

北京五輪から4カ月。東アジアを政治外交史の観点で研究している川島さんから見て、中国の外交や対外姿勢に変化はありますか。

「対外的には少しリラックスしたかなという印象です。五輪を成功させなければ、という圧力から解放されたのでしよう」

東京大准教授(東アジア政治外交史)

かわしま しん  
**川島 真さん**



68年生まれ。北大助教授を経て06年から現職。「中国近代外交の形成」でサントリー学芸賞。編著に「東アジア国際政治史」など＝松本敏之撮影

### 自画像

上海万博までは国際社会と協調重視でいこう、ということはあると思います」

「米国発の金融危機を受けて、中国は欧米と協調する形で利下げをしました。これも協調路線ですか。」

「中国は国益にかなうことを、国際協調や対米協調という形で表現することがあります。今回、金融危機が世界に波及する前から、中国経済には構造的問題があった。労働コストが上がる中、中国より安価な製品を作る国々の登場で、輸出型の製造業が打撃を受けていました。だから、国際協調を強調しながら、国内経済でこ入れのため利下げをしたのです。国益重視と国際協調は、時に相反しません」

「指導部の中には、『国際協調を進め国際競争力を高めよう、先に豊かになる者が引く張れ』というグループと、『国内産業をある程度は保護して、富の分配や平均化を重視したい』というグループがあるようです。内政問題は極

めて深刻ですが、どちらが優勢になるかによって外交も変わるでしょう」

#### ■多様な外交主体

「ところで、中国外交を

知るには、中国だけを見ていてはわからなくなりました。そう実感しているそうですね。

「単に中国が国際政治において影響力が強まっただけでなく、世界中あちこちに『中国』がいて、さまざまなアクター(主体)が現地と別々に関係を築いているというのが現実です。決して一枚岩ではありません。昔はある種のイデオロギーがあって、北京の

様子を見ていけばいたいたい間違いなかった。今は、例えば対アフリカ外交といっても、現地で調べると、北京はアクターの一つです。金のばらまき方も武器輸出も、相手国によって多様です」

「中国大使館は現地で独自に中国企業のおっせんをして

いるし、北京政府も訪中したアフリカの首脳を省政府に引き合わせたり、さらに地方政府が地元企業と会わせたりしています。一般的な政府の途上国援助(ODA)とは違う。でも外から見ると、みんな『中国外交』なんです」

「存在感が巨大になった中国は、自分自身をどう見ているのでしょうか。『先進国の仲間入り』でしょうか。『大国の一つ、でしょう。ただし主要国であっても先進国ではありません。先進国だと言ったら、守るべき国際ルールや経済的な負担が増えるし、民主化や人権問題で解決の義務が出てしまう。洞爺湖サミットでも『我々は南側の代表だ』と強調しました。当分はあくまでも途上国です」

The Asahi Shimbun

1人あたり国民総所得(2007年)

15位	米国	46,040 <sup>ドル</sup>
19位	英国	42,740
23位	ドイツ	38,860
25位	日本	37,670
49位	韓国	19,690
132位	中国	2,360

(世界銀行の統計から)

「先進国かどうかは、主に1人あたりのGDPが基準です。経済大国なのに発展途上国。こんな国は今までありませんでした。しかも国内にたくさん抱えている問題

「主権に踏み込む

「世界秩序において中国型の何かを作ろうとか、米国に取って代わろう、とは現状では考えていないと思います。でも、あくまで内政問題が処理できればですが、自分の『庭』くらいは主張を通したい、と思うかもしれません」

「北東アジア、東南アジアを含んだ地域です。インドは入らないでしょう」

国内総生産(GDP)でドイツを抜いても?

「日本も入りますか。入っているように中国には見えるでしょうね。でも、日本が簡単には入りたがらないというのも分かっている」

「しかし、これは日本外交にはチャンスです。中国がそろって東アジアに強く出てくればくるほど、東アジア諸国からの日本への期待が強くなるわけですから」

「注目しているのは東南アジア諸国連合(ASEAN)の変化です。これまでは内政不干渉を原則にし、みんなが反対しない課題でまとめる、というスタイルでした。しかし、ミャンマー(ビルマ)問題が典型ですが、民主化を求め、主権に踏み込み始めています。特にシンガポールやフィリピンがそうです。これは中国には好ましくないでしょう。しかし、中国もアフリカでは主権に踏み込んでいます。踏み込むということは踏み込まれることですから。どこまで行くのか、それが今後の中国外交を考える鍵です」

「五輪後の中国」は今回で終わります。

聞き手 刀祿館正明